

## 空をながめて、美術館に行こう

美術館に行くための準備運動として必要なことがあるとすると  
今日空を見てね、天気どうだと、雲が綺麗だなと、風は気持ちいいなとか  
そういうごく自然でたいしたことないけど  
非常に大事な日々の空気というか、気配というか  
昔の人が普通にやっていたことをやっているかどうかを練習して  
知識の勉強ではなくて  
空を見る習慣をつけて美術館に来てください

(館長 新見 隆 —OPAM開館に向けての挨拶より)

## I. びじゅつって、すげえ！

### 美術は日常の中にある

きれいだなあと感じることは「美術している」こと

鳥の声で目覚めるまだ夜明け前の朝。東の空は徐々に明るくなり、上る太陽は青金に光っていく。雨の日の散歩で、水たまりに飛び込めば四方八方にしぶきが飛び散る。雨あがりの葉っぱの上や蜘蛛の巣は宝石だらけ。ちょっと地面にしゃがみ込むだけで、発芽したばかりのタンポポの芽が、これから咲き誇る命の力をすでにのぞかせていることに気づく。夕方西の空に沈んだ太陽を追いかけると沈む下弦の月は、空気を一層きりりとする。こうした毎日の中に在るたくさんの美しいモノやコト。日々の暮らしの中で、美を発見する目を獲得すれば、世界はとたんに魅力あふれたものとなる。大分県内、ちょっと出かければ、もう山、山、山。市内も足元に目を向ければ、道路わきに様々な植物が生えている。これらの植物を愛でることができるなら、美術館はいらないかもしれない。

美術とは何か？ その答えの一つは、美しいものを美しいと感じる心。美しいと感じるものは身の回りにいっぱいあるだろう。では美術館とは？ 美術館は博物館の一種であり、美術作品を中心とした文化的遺産を収集・調査・研究、保存・修復、そして展示を行う施設である。そんな言い方をすると、何やら高尚なもの、敷居の高いものを感じる人がいるかもしれない。美術館では美術の歴史や作家に対する知識、あるいは技法や素材に関することなど何も知らなくても、美術作品を見ることを楽しむことはいつでもできる。美術館は何かを学ばなくてはいけない場所ではない。自分なりのモノの見方ができるとモノを見るのが楽しくなり、日常が生き生きとしてくる。きっと美術作品に接することも楽しくなるだろう。

美術とは決して特別なモノでも、難しいモノでもない。日常に在る身近なモノに目を向け、きれいだなあ、面白いなあと感じることは「美術している」ことだ。少し難しい言葉で言うと、美術とは認識の拡大である、と言ってよいだろう。情報や知識に頼らず、一人一人が自分の視点を持つことで、美術作品と出会った時に、自分の見方で楽しめるのだ。

自分なりのモノの見方ができると、楽しい

2015年4月24日、大分県立美術館(OPAM)は開館した。

しかし新しく美術館ができたといっても、そもそも何をするとこなのだろう。普通は、美術館といえば展覧会を開催しているところ、つまり展示が一番に思い浮かぶことだろう。しかし展覧会を開催するためには、作品や、作った人の調査・研究をしなくてはならないし、次世代に伝えていくために保存・修復も大切な仕事だ。美術館には、大きく分けると「調査・研究」「保存・修復」、そして「展覧会の開催」という3つの仕事がある。そして昨今では、これらに加えて「教育普及」の仕事も重要であると言われ始め、OPAMはこの教育普及に力を入れている。

では美術館の教育普及の仕事とはどういったものだろうか。例えば、わかりやすい作品解説、ふだん家や学校ではできないダイナミックな制作活動、専門的な知識や技術に触れる、などがすぐに思い浮かぶ。しかしこれらは教育普及の目的ではなく、手段である。では教育普及の目的とは？それは、多くの人にモノを見る楽しさを知ってもらいたいことだ。そしてそのためのきっかけや出会いを作ったり、ドキドキ、ワクワクするような好奇心を触発することが教育普及の仕事だと考えている。逆に言えば、一人ひとりが自分でモノを見る楽しさを知っていれば、そして個人が個人として美術館を楽しむことができるのなら、教育普及の活動はなくてもいいだろう。一番大切なのは、自分なりのモノの見方ができることだ。そうすればいたるところに在る“美”を発見する独自の視点を獲得でき、それは美術作品に出会った時、見方や楽しみ方が膨らむことにつながる。



榎本寿紀

Toshiki Enomoto  
大分県立美術館 学芸普及課 教育普及グループ  
グループリーダー

飛行機では窓際、車では助手席は外せない。突然「あそこ！」と止まり、石やタネをひろう。好奇心という名の欲望は人一倍強く、大分県内の動植物から鉱物までを探索中。大分に移り住んだにも関わらず、シイタケを美味しいと感じたのは人生で2回だけ。これからは???

